

保育実践におけるアイデンティティの揺らぎ体験と 保育者効力感との関係

西山 修 ・ 若田 美香* ・ 馬場 訓子

This study aims to examine the relationship between childcare workers' "experience of identity swaying" as described in their autobiographical memory and their occupation efficacy. First, the influence that stemmed from the experience of childcare workers' swaying on their sense of efficacy is examined. The results showed that those who experienced identity swaying in their autobiographical memory had a remarkably higher sense of efficacy as childcare workers than those who didn't. On the other hand, no difference was found in their sense of efficacy depending on the trigger of the identity swaying. The differences in childcare workers' descriptions depending on the level of their sense of efficacy were then investigated the records of childcare workers with a high sense of occupation efficacy showed a higher level of ego involvement stays as a memory that can be utilized in the future. Closing the article, the authors examine future issues.

Keywords : Childcare Practice, Identity Swaying, Autobiographical Memory, Childcare Workers' Efficacy

問 題

保育職は近年、就業構造の変化、家族形態の多様化等を背景に、子どもや保護者を支援する最も身近な専門職として、その社会的役割が拡大している。保育者（幼稚園教諭、保育所保育士、及び認定こども園保育教諭）は、様々な保育経験を重ねる中で、自分と向き合いつつ、高い専門性を身に付けることが求められている。本論では、これまでの保育実践の中で、保育者としてのアイデンティティが揺らいだエピソードの記憶を「揺らぎ体験」として捉え、保育者効力感等との関係を検討する。これにより保育者が、自信と見通しを持って保育実践に向かえるよう、如何なる支援が可能か考えるための基礎的な知見を得ることを目指す。

保育者が自らの保育実践において、どのようなエピソードを記憶に留め、どう活かしてきたかは、保育の質と保育者としてのその後の成長に影響すると考えられる。吉田ら（2015）は、保育の中で、保育

者が気づき、体験した記憶を「気づき体験」と捉え、広くエピソードを収集し、経験年数による特徴等を分析した。具体的には、保育者が何に対して気づきを得たか、そのときの状況や様子、その後どのように保育に活かされたか等について自由記述を求め、保育経験年数毎の違いを検討した。その結果、どの経験年数の保育者も同様に「保育者の姿勢」に関する気づき体験が最も多く、続いて「子どもの心的状態や行動」に関するものが多かった。また、中堅、熟練保育者になると、表面に表れない子どもの思いへの気づきが多くなっていることが明らかになった。さらに、熟練保育者は、「保護者と保育者のつながり」「子どもと保育環境」等、園生活全体に気づき体験を広げていることが示唆された。

この研究では、保育者の気づき体験を自伝的記憶（autobiographical memory）として扱っている。自伝的記憶とは、過去の自己に関わる記憶の総体を指す（e.g., 佐藤・越智・下島, 2008）。Bluck（2003）

岡山大学学術研究院教育学域 700 - 8530 岡山市北区津島中3 - 1 - 1

*真庭市立天の川こども園 719 - 3106 真庭市野川797

Relationship between the Experience of Identity Swaying in Childcare Practice and Childcare Workers' Efficacy
Osamu NISHIYAMA, Mika WAKADA*, and Noriko BABA

Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tshushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

*Maniwa City Amanogawa Centers for Early Childhood Education and Care, 797 Nogawa, Maniwa 719-3106

によると、この自伝的記憶には、自己（自己の一貫性や自己評価を支える）、社会（対人コミュニケーションに寄与する）、及び方向付け（行動や態度決定を支え、動機付ける）という3つの機能があるとされる。吉田・西山（2017）が述べるように、保育者は、自分が行った保育実践中の出来事や対応を振り返り、省察し、望ましい自己像を描きながら、次の保育に活かす。また、保育は、子どもや保護者、同僚等、多くの対人的関係の中で語り合い、営まれるものと言える。さらに、保育の中で得た経験によって、次の保育を行う際の判断の基準が形作られ、次への方向付けとなることであろう。保育者は、実践の中で経験した出来事を具に記憶として保持し、経験知として次の実践に繋げていると言える。また時に、自らの辛かった経験を想起することで当時とは違う自己を確認したり、様々な経験の記憶が、一貫性のある望ましい自己像（保育者像）を維持したりすると考えられる。佐々木・皆川（2013）によれば、自伝的記憶は、自分が経験した出来事に関する記憶であり、記憶に残ることによって後の想起に繋がり、長期的に影響するとしている。自伝的記憶は自己を構成する要素であり、その集合体が個人のアイデンティティを形成する（e.g., Cohen, 1996; Conway, Singer, & Tagini, 2004）。

保育者の気付き体験を幅広く捉えようとした吉田ら（2015）に対して、本論では、保育者のアイデンティティに関わる揺らぎ体験に焦点化する。アイデンティティ（ego identity）とは、「自己斉一性と連続性が明確であること、さらに他者の承認から得られる自信」である（Erikson, 1980）。畑野（2020）は、これを換言し、「自我が自己を空間的に斉一するように、また過去・現在・未来と時間的に連続するように自己をまとめた結果得られる自己一致の感覚がアイデンティティである」と要説している。

また、中間ら（2015）によれば、アイデンティティの研究が展開される中で起こったこととして、その発達の枠組みに関する見解の変化を指摘している。すなわち、もともとアイデンティティの発達は、自分がコミット出来るところを模索し、最適なものを選択し、アイデンティティの達成に至る過程と考えられてきた。しかし実際には、達成後に再び、アイデンティティの探求が展開されること等から（e.g., Stephen, Fraser, & Marcia, 1992）、個人が多様な選択肢について考え、選択に至る過程のみならず、その選択を実践的に試みながら、さらに探求する過程も含め、アイデンティティの発達過程を捉えるべきと考えられるようになってきている。

足立・柴崎（2010）は、保育者がどのような問題

や落ち込み、すなわち「揺らぎ」の中で、保育者アイデンティティを形成し、熟達していくかを検討した。この研究では、保育経験や所属の異なる24名の保育者を対象に、丁寧なインタビュー調査を実施し、SCQRMを用いた分析を行っている。その結果、保育者には、養成校以前の時期及び養成期の段階から、熟練期の段階に至る、その成長過程に応じた様々な揺らぎが確かに存在することが示された。また、保育者としての経験を重ねる中で、様々な揺らぎを体験し、保育者としてのアイデンティティの混乱と再構築を繰り返しながら熟達していくことが示された。さらに、その過程には、相談できる重要な他者の存在など、保育者を取り巻く職場環境が大きく関与していることなどが示唆された。

本論では、保育実践の中で、保育者としてのアイデンティティが揺らいだエピソードの記憶を「揺らぎ体験」とし、保育者効力感等との関係を検討する。保育者効力感とは、三木・桜井（1998）により、「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことが出来るであろう保育的行為をとることが出来る信念」と定義されている。効力感とは、ある行動が自分にうまく出来るかという予期の認知されたものであり（Bandura, 1977）、行動と直接的な関連がある。西山（2006）は、保育者効力感の高い保育者は、何らかの実践を意識的に行っていることを確認し、保育者効力感という認知面と保育実践という行動面は強く連動していると述べている。

先述の吉田ら（2015）の知見を踏まえ、吉田・西山（2017）は、保育実践における気付き体験と保育者効力感との関係を分析している。その結果、保育実践での気付き体験を挙げられる保育者は、挙げられない保育者よりも明らかに保育者効力感が高いことが示された。さらに、保育者効力感が高い保育者の気付き体験の内容を、保育者効力感が低い者と比較し、気付き体験の内容と保育者効力感との関係を検討した。効力感の高い上位群は、その解決から、新たな発見を得た体験による気付きがあり、「よかった」「楽しい」といった肯定的な表現が見受けられた。他方、下位群では、気付いたことを今後の課題として表記している点が特徴的であった。さらに、就職の頃の気付き体験を挙げる保育者より、保育経験を重ねた後の気付き体験を挙げる保育者の方が保育者効力感が高く、保育経験を重ねてからの気付き体験が、保育者効力感へ結び付いていることが示唆された。

保育者を目指して就職したにもかかわらず、自らの実践に自信や見通しが持てず、保育職を辞する者は少なくない。教師・保育者の成長過程に関する先

行研究 (e.g., 高濱, 2001) からは, 総じて初任期の困難さが指摘されている。また, 子どもや保護者, 同僚との人間関係の中で, 個人のアイデンティティはその成長に応じた揺らぎを経験したり, 再構築されたりする (足立・柴崎, 2010)。保育者の専門性とは何か, 保育者養成に求められるものは何かという議論において, 保育者のアイデンティティの重要性が従来から指摘されてきたが (e.g., 森上, 2000), 保育者の社会的役割や責任が拡大する中で保育を実践していくためには, その根底を成す保育者自身の自我の成熟や効力感が大きく影響すると考えられる。

そこで本論では, その第一着手として, 保育者の自伝的記憶であるアイデンティティの揺らぎ体験と保育者効力感との関係を検討する。具体的には, 自伝的記憶としての揺らぎ体験を持つ保育者と持たない保育者では, 保育者効力感に違いがあるのか, 揺らぎ体験の契機と保育者効力感との関連はあるのか, 等について検討する。また, 揺らぎ体験に関わる現職保育者の記述や特徴語等と保育者効力感との関係も検討する。

方 法

調査対象・時期

岡山県内で開催された保育者研修・講習の受講者 91 名に対し, 質問紙調査を実施した。質問紙のうち, 後述の分析に必要な項目全てに回答があった保育者 79 名 (所属: 公立幼 22 名, 私立幼 8 名, 公立保 16 名, 私立保 22 名, こども園等 11 名。性別: 男性 1 名, 女性 78 名) を分析対象とした。保育者の平均年齢は 41.30 歳 (標準偏差 6.82), 保育経験年数の平均は 13.78 年 (標準偏差 6.91) であった。調査時期は, 20XX 年 8 月であった。

調査内容・手続

アイデンティティの揺らぎ体験と保育者効力感との関係を検討するため, 質問紙への回答を求めた。質問紙には次の項目を組み込み, 分析に用いた。

アイデンティティの揺らぎ体験: 「これまでの保育の中でもっとも記憶に残っている, 自分の保育者としてのアイデンティティが揺らいだ体験を 1 つ挙げ, 次の①~④などを含め出来るだけ詳しく教えてください」と尋ね, 自由記述を求めた。具体的には, ①その時の状況や様子, ②その時あなたが感じたこと, ③その後, その体験が保育に生かされたこと, 及び④今振り返ってその時のことをどう思うか, とした。これらにより自伝的記憶を想起する手立てとした。また, 「アイデンティティとは, 自己の存在証明, 自分らしさなどと訳されます」と簡単な説明を付した。さらに, その経験が, 何歳の頃で, 保育

者になって何年目の頃か (経験の時期) を尋ね, 記入を求めた。

保育者効力感尺度: 三木・桜井 (1998) による 10 項目。回答は「非常にそう思う」「かなりそう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「ややそう思わない」「かなりそう思わない」「全くそう思わない」の 7 段階評定 (7~1 点) で得点化した。細かな違いを捉えるため 7 段階評定としている点には留意を要する。

保育の振り返りの意識: 2 項目。具体的には, 「私は, 自分の保育を振り返ることが多い」「私は, 自分の保育を振り返ることが少ない (反転項目)」とし, 今回の分析に用いていない 4 項目と混ぜて提示した。回答は「非常にあてはまる」「かなりあてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかというにあてはまらない」「ほとんどあてはまらない」「全くあてはまらない」の 7 段階評定 (7~1 点) で得点化し, 2 項目の合計点を分析に用いた。

その他, 「現在の保育の充実度」「これから保育をやっていく自信 (保育の遂行への自信)」を 0~100 点で得点化を求めた。回答は無記名とし, フェイスシートとして「性別」「年齢」「所属 (公立私立, 幼保等)」「保育経験年数」等の記入を求めた。質問紙の一部には本論では用いない, 保育内容「人間関係」に関わる効力感を問う項目 (西山, 2006) 等も含まれた。

調査対象にはデータは全て統計的に処理し, 個人を特定することはないこと, 結果の公表では匿名性を厳守すること等を伝え, 同意を得た者のみに調査を実施した。回答に要する時間は 20~30 分程度であった。記入には十分な時間を確保し, 出来るだけ詳細な記述を求めた。なお, 調査実施に関わる配慮等は, 日本発達心理学会 (2000) の倫理基準に準じた。

結果と考察

1. アイデンティティの揺らぎ体験の有無と保育者効力感

まず, 保育者の揺らぎ体験の有無と保育者効力感との関係を検討した。表 1 上欄には, 保育者の揺らぎ体験 (あり・なし) による, 保育者効力感の平均値と標準偏差を示した。独立変数を揺らぎ体験の有無, 従属変数を保育者効力感とする対応のない 1 要因の分散分析を行った。その結果, 統計的に有意な主効果が認められた ($F_{(1,77)} = 7.93, p < .01$)。

結果から, 揺らぎ体験を上げることが出来る保育者は, 揺らぎ体験を上げることが出来ない保育者より, 現在の保育者効力感が高いことが明らかになっ

た。西山 (2006) は、保育者効力感の高い保育者は、何らかの実践を意識的に行っていることを確認し、効力感という認知面と保育実践という行動面は、強く連動していると述べている。揺らぎ体験を挙げる保育者は現在、高い効力感を持ち、見通しを持って保育実践を行っていると考えることができる。

次に、保育者の揺らぎ体験の有無と今回取り上げた関連変数との関係を検討した。表1下欄には、保育者の揺らぎ体験 (あり・なし) による、「保育の充実度」「保育の遂行への自信」「保育の振り返りの意識」の平均値と標準偏差を示した。1 要因分散分析の結果、「保育の遂行への自信」において、有意な主効果が認められた ($F_{(1,77)} = 6.66, p < .05$)。「保育の充実度」「保育の振り返りの意識」には、有意な主効果は認められなかった (順に、 $F_{(1,77)} = .10, 1.88$, いずれも *n.s.*)。「保育の遂行への自信」は、これから保育をやっていく自信について数値化を求めたものであり、先の保育者効力感の結果を別の訊ね方から確認出来たとも言える。一方、現時点での「保育の充実度」には、揺らぎ体験を有していることが直接影響するものではなかった。「保育の充実度」は、現在置かれている環境要因、例えば、職場環境や立場、子ども、保護者、同僚との関係など外的な要因に帰する部分が大きいと考えられる。「保育の振り返りの意識」では、揺らぎ体験の有無により、保育実践を振り返ったり省察したりする傾向に違いがあることも予想されたが、違いは認められなかった。揺らぎ体験を有している保育者が、特に振り返りを意識して行っている訳ではないと言える。

さらに、揺らぎ体験あり群となし群における、年齢や経験の特徴を確認した。保育者の年齢では、揺らぎ体験あり群は平均41.38歳 (標準偏差6.92)、なし群は平均41.06歳 (標準偏差6.67)であった。また、保育経験年数では、揺らぎ体験あり群は平均14.40年 (標準偏差7.08)、なし群は平均11.67年 (標準偏差6.04)であった。1 要因分散分析を行った結果、いずれも有意な主効果は認められなかった (順に、 $F_{(1,77)} = .03, 2.21$, いずれも *n.s.*)。今回、「これまで

の保育の中でもっとも記憶に残っている、自分の保育者としてのアイデンティティが揺らいだ体験を1つ挙げ、(中略)出来るだけ詳しく教えてください」と尋ね、自由記述を求めた。揺らぎ体験を挙げる事が出来ない保育者も一定数いることが確認されたが、揺らぎ体験を挙げる事が出来た保育者と比べたとき、年齢や保育経験年数の違いはないと言える。

2. アイデンティティの揺らぎ体験の契機と保育者効力感

次に、保育者の揺らぎ体験を、その契機により分類・整理した。揺らぎ体験には、保育の中で、子どもとの関わりを契機としてエピソードが起こり、自らのアイデンティティの揺らぎを覚えるもの、保護者との関わりを契機としてエピソードが起こり、子どもとの関わりに範囲が拡大するものなど様々である。ここでは、その最初の契機が何であったかに注目し分類した。その結果、分類カテゴリーとして、「子ども」「保護者」「園長・同僚」「その他」を設定することができた。例えば、ある保育者は、多動で多くのサポートが必要な男児との関わりを契機に、自信を失う。様々な取組を試みる中で、これまで一人一人の子どもと向き合うことが出来ていなかった自分に気付かされる (「子ども」に分類)。「その他」の中には、産休明けの不適應、外的要因による環境の急変などが含まれた。信頼性を確認するために、第1筆者と共著者1名が、全データの約20% ($n=15$)のデータを無作為に選出し、 κ 係数を求めた。その結果、 $\kappa=.91$ という良好な値を得た。そこで、全体の分類は第1筆者が行った。

表2上欄には、保育者の揺らぎ体験の契機による保育者効力感の平均値と標準偏差を示した。独立変数を揺らぎ体験の契機、従属変数を保育者効力感とする対応のない1 要因分散分析を行った。その結果、統計的に有意な主効果は認められなかった ($F_{(3,57)} = .89, n.s.$)。揺らぎ体験の契機の違いによる、現在の保育者効力感への影響は見られなかった。

次に、保育者の揺らぎ体験の契機と今回取り上げ

表1 アイデンティティの揺らぎ体験の有無による諸変数の平均値及び標準偏差

	揺らぎ体験あり $n=61$	揺らぎ体験なし $n=18$	全体 $N=79$
保育者効力感 (三木・桜井)	46.08 (4.83)	42.28 (5.71)	45.22 (5.25)
保育の充実度	67.87 (14.46)	66.56 (17.81)	67.57 (15.18)
保育の遂行への自信	71.77 (16.28)	60.22 (18.00)	69.14 (17.27)
保育の振り返りの意識	9.92 (2.01)	9.17 (2.15)	9.75 (2.05)

た関連変数との関係を検討した。表2下欄には、保育者の揺らぎ体験の契機による、「保育の充実度」「保育の遂行への自信」「保育の振り返りの意識」の平均値と標準偏差を示した。1要因分散分析の結果、「保育の振り返りの意識」において、有意な主効果が認められた($F_{(3,57)}=3.20, p<.05$)。「保育の充実度」「保育の遂行への自信」には、有意な主効果は認められなかった(順に、 $F_{(3,57)}=1.20, .84$, いずれも*n.s.*)。そこで、「保育の振り返りの意識」について、Bonferroni法による多重比較を行ったが、各水準間に有意な違いは見られなかった。

さらに、揺らぎ体験の契機における、年齢や経験の特徴を確認した。表3には、契機ごとに、保育者の年齢、保育経験年数、揺らぎ体験時の年齢、揺らぎ体験時の経験年数、揺らぎ体験は今から何年前の出来事かについて、その平均値と標準偏差を示した。1要因分散分析の結果、「揺らぎ体験は何年前か」において、有意な主効果が認められた($F_{(3,57)}=2.91, p<.05$)。その他では、有意な主効果は認められなかった(順に、 $F_{(3,57)}=2.42, .47, .54, .47$ いずれも*n.s.*)。そこで、「揺らぎ体験は何年前か」について、Bonferroni法による多重比較を行った結果、「その他」よりも、「保護者」において有意に年数が多いことが判明した。

例えば、「保護者から新卒の担任では不安と暗に言われた」「担任が見逃していた子どもの行動について保護者から指摘を受けた」など、保護者からの指摘やクレームが、保育者としての自己を見つめ直

す契機となり、揺らぎ体験として記憶に刻まれていることは考えられる。保護者を契機としたアイデンティティの揺らぎ体験は、「その他」に比べ、長く自伝的記憶として保持され、現在の保育実践に影響を及ぼしている可能性がある。

3. 保育者効力感の高低からみたアイデンティティの揺らぎ体験の特徴

ここまでの分析から、揺らぎ体験を挙げる保育者は、現在の保育者効力感が確かに高く、保育実践に対する自信や見通しを持っていることが明示された。自伝的記憶としての揺らぎ体験を持つということそれ自体に、効力感に関わる意義があると言える。ただし、揺らぎ体験の契機の相違が保育者効力感に及ぼす影響は見出されなかった。ここでは、保育者の揺らぎ体験に関わる自由記述データを量的に分析することを試みる。具体的には、現在の保育者効力感の高低により、アイデンティティの揺らぎ体験に関わる記述に如何なる特徴があるか、テキストマイニングを用いて検討する。

まず、揺らぎ体験を挙げた保育者の内、保育者効力感が高い者(平均値+½SD以上の保育者21名。以下、高群)と、保育者効力感が低い者(平均値-½SD以下の保育者15名。以下、低群)を選出し、残りの25名を中群とした。3群に実質的な違いがあるか確認するため、保育者効力感を従属変数とする1要因分散分析を行った結果、有意な主効果が認め

表2 アイデンティティの揺らぎ体験の契機による諸変数の平均値及び標準偏差

	子ども n=25	保護者 n=7	園長・同僚 n=19	その他 n=10
保育者効力感(三木・桜井)	45.20 (5.13)	47.57 (6.50)	45.84 (3.95)	47.70 (4.35)
保育の充実度	65.76 (12.78)	71.86 (20.43)	71.74 (12.74)	63.00 (16.53)
保育の遂行への自信	68.96 (19.58)	79.86 (14.27)	71.84 (14.16)	73.00 (11.60)
保育の振り返りの意識	10.28 (1.60)	11.00 (2.08)	8.84 (2.32)	10.30 (1.64)

表3 アイデンティティの揺らぎ体験の契機からみた年齢、保育経験年数等の平均値及び標準偏差

	子ども n=25	保護者 n=7	園長・同僚 n=19	その他 n=10
保育者の年齢	40.04 (5.48)	45.14 (6.72)	43.42 (8.38)	38.20 (5.67)
保育経験年数	14.32 (5.77)	17.00 (10.17)	14.40 (7.59)	12.80 (7.27)
揺らぎ体験時の年齢	31.60 (7.76)	29.00 (7.51)	33.63 (10.05)	32.20 (7.67)
揺らぎ体験時の経験年数	7.84 (4.85)	5.29 (4.27)	7.63 (5.27)	7.90 (6.66)
揺らぎ体験は何年前か	8.44 (6.27)	16.14 (10.02)	9.79 (8.14)	6.00 (5.42)

められた ($F_{(2,58)} = 95.74, p < .001$)。Bonferroni法による多重比較の結果、高群は中群より高く、中群は低群より高いことが確認された。

保育実践におけるアイデンティティの揺らぎ体験について、保育者効力感の高低による全体的な傾向を検討するため、全記述データを対象にテキストマイニングソフト・KHCoder (Ver.3.beta.07e) による分析を試みた。KHCoderは、ChaSen (松本, 2000) による形態素解析を行った上で、抽出された語の詳細な計量的分析を行う。取り出した語の統計分析、コーディング結果の統計分析、もとのテキストを確認するための検索や閲覧などの機能を持ち、柔軟な分析の環境を提供する (樋口, 2012)。質的なテキストデータを数値データと同じように扱うため、恣意的になりがちな作業を避け、膨大なテキストデータに潜む情報を要約し理解するには有用と言える。

まず、保育者が記述した全文をChaSenにより分かち書きし、10,324語を抽出した。抽出語の種類は1,359語であった。その中から3,921語が分析に用いられた。分析に用いた品詞は、KHCoderの品詞体系に従った。また、一部の語を分けずに分析するため、強制抽出の処理を行った (例えば「人間関係」「保育者」「保護者」など)。

次に、保育者による記述の全体的傾向を把握するため、出現数10前後を目安に「共起ネットワーク」の検討を行った。共起ネットワークとは、出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだものである (樋口, 2020)。本論では、保育者効力感の高さとアイデンティティの揺らぎ体験の記述の特徴との関連を検討する。

図1には、保育者効力感の高さ (高群, 中群, 低群) を見出しとして含めた共起ネットワークを示した (表示語数51語 (入力語数68語), 表示共起関係80 (入力共起関係182), Jaccard係数 .167以上)。共起ネットワークでは、布置された位置よりも、線で結ばれているかどうかにかんして意味がある。線が太いほど共起の関係は強い。また出現数の多い語ほど大きな円で示されている。表4には、保育者効力感高・中・低群毎の特徴語とJaccardの類似性測度も示した。Jaccard係数は、語の共起の強さを測るのに適した係数 (樋口・中村・周, 2022) であり、各群の特徴を掴むために有効である。得られた特徴語は、コンコード分析によって前後の文脈を逐一確認した。

図1では、3群に共通する語が中央付近に、2群間に共通する語が両群の間に布置されている。また、群毎の特徴語が周辺部に示されている。共通する語から結ばれた線の太さは、語によって異なる。

まず、保育者効力感・高群では、「自分」「思う」「見る」「感じる」「言葉」「保育」などの語との共起関係が強い。また、独自の語として「保護者」「自分自身」などが示された。高群では、「自分」「自分自身」という語が、エピソードの記述の中に頻出している。例えば、「自分なりに」「自分の保育」「自分自身が学んで」等のように、それまでの自分の思いや保育観とのズレ、欠損を認識し、保育者としてのアイデンティティが揺らいだ体験を自分なりに解釈している姿が表れている。動詞に注目すると「思う」「見る」「感じる」などと共起関係が強く、「～することが大切だと思った」「～の大切さを感じた」等のように、揺らぎ体験を自ら振り返り、これから何を大切にしていけばよいかといった情報を含める形で記憶されていることがうかがえる。保護者に関わる記述が比較的多いのも特徴と言える。周囲の「言葉」を受け止め、「自分」の「言葉」を振り返り、「自分」なりに思考を巡らせ、「今」に繋がっていることを実感している。これからの保育に活かすうる形で、自伝的記憶が想起されやすいようパッケージ化されている。揺らぎ体験は、総じて自我関与性が強く、現在に至っては、自らの連続性を確認する役割を果たしていると言える。

次に、保育者効力感・中群では、「子ども」「保育者」「思う」「気持ち」「園」などの保育に関わる一般的な語と共起関係が強い。また、独自の語として「気持ち」「理解」「気」「遊び」などが示された。子どもの「気持ち」、親の「気持ち」を「理解」しようとしたり、「気」になる「子ども」に配慮したりしたエピソード等の中で使用されている。「遊び」は、子ども中心の保育を実践していく上で、保育者が大切にしていきたいスタンスの中で記述されている。動詞に注目すると、「分かる」「考える」などが特徴的と言える。この内、「分かる」については、「～だということが分かった」「その時は分からなかった」といった様々な文脈で使われている。

さらに、保育者効力感・低群では、「クラス」「考える」「保育」「保育者」「関係」「向ける」などの語との共起関係が強い。また、独自の語として「向ける」「反省」「関係」などが示された。「クラス」の語は、子どもの集団が強く意識されているとき、複数担任の中での難しさが意識されているときなどに現れている。後者については、多くの場合、クラス内の上司、同僚に関わるエピソードが記されている。動詞に注目すると「考える」「向ける」「見る」「言う」などと共起関係が強い。考えることの重要性を意識しつつも、これからの保育に活かすうる具体的な記述には欠ける傾向がある。また、「向ける」は、「発

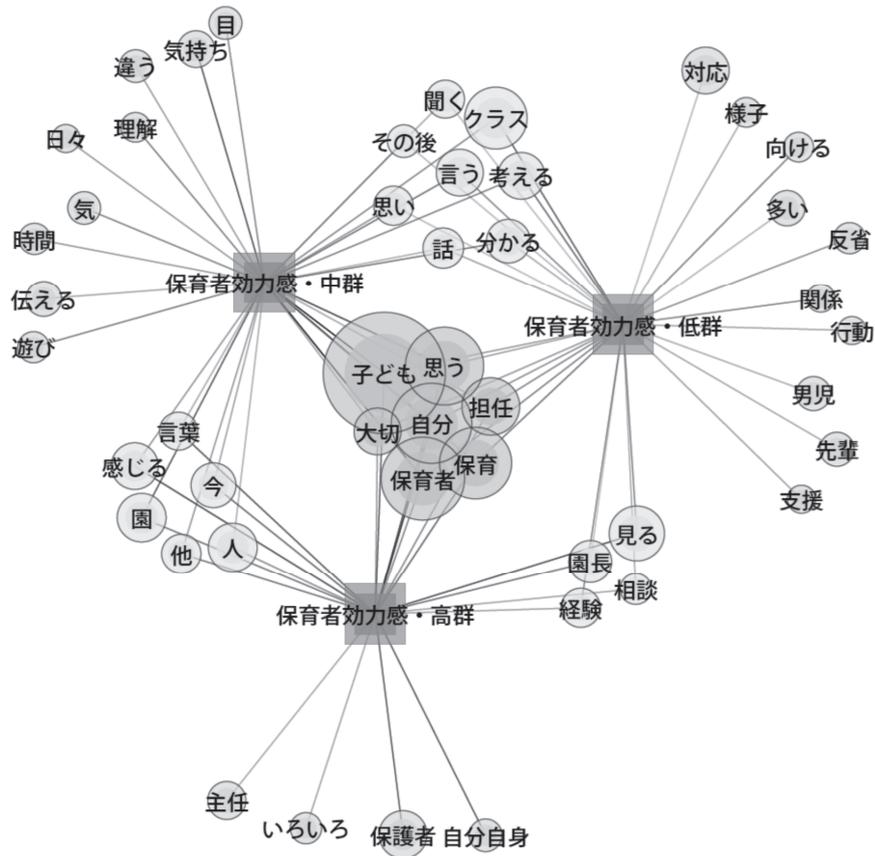


図1 保育者効力感各群における主要抽出語の共起ネットワーク

表4 保育者効力感高・中・低群別にみた特徴語と Jaccard の類似度測度

保育者効力感・高群		保育者効力感・中群		保育者効力感・低群	
特徴語	Jaccard 係数	特徴語	Jaccard 係数	特徴語	Jaccard 係数
自分	.364	子ども	.451	クラス	.286
思う	.333	保育者	.413	考える	.259
見る	.324	思う	.333	保育	.242
感じる	.323	気持ち	.310	保育者	.222
言葉	.296	園	.294	関係	.222
保護者	.296	言う	.250	向ける	.222
自分自身	.292	分かる	.250	見る	.219
保育	.270	遊び	.231	経験	.217
今	.267	考える	.222	担任	.214
園長	.259	気	.222	言う	.207

表会に向けて」「就学に向けて」など目指すところを示す文脈で使用されている。全体として、揺らぎ体験は、回りの人的要因や環境によって引き起こされたものと捉えられており、また、今とどう繋がっているかといった記述は少ない。

4. 保育者効力感の高低からみた揺らぎ体験の具体的な記述

ここでは、保育者効力感が高い者がどのような揺らぎ体験の内容を記述しているのか、保育者効力感が低い者と比較し、揺らぎ体験の内容と保育者効力感との関係を探索的に示すことを試みる。表5には、

保育者効力感・高群と低群における記述例を示した。

保育者Aから保育者Dは、特に高い保育者効力感を示した保育者の記述例である。保育者効力感とは、「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことが出来るであろう保育的行為を取ることが出来る信念」とされる（三木・桜井、1998）。これらの保育者は、将来の保育実践に対して良好な予期を持っている者と言える。

保育者Aは、就職当手を振り返り、必死にもがきながら指導していた頃を広く揺らぎ体験として挙げている。その後、出産・育児等を経て再就職し、自分自身が学び取ってきたことを踏まえながら、当時

の自分を振り返り、現在の保育者としての自分を確
認している。また、保育者Bは、保護者から自分
が見えていなかったところを指摘されたエピソードを
挙げる。これを契機に、一人一人の子どもの事情や
背景も含め敏感に察していくことの大切さを認識し
ている。さらに、保育者Cは、新たな取組として子
育て支援を進めた経験を挙げる。成果を認められず、
どう進めてよいか苦しんだ経験も、その後の土台と
なっていると述べる。保育者Dは、保護者への連絡
帳への書き方に配慮が足りなかったことから、保護
者との関係が壊れてしまったエピソードを挙げる。
これを契機に相手の立場になって物事を進めること
を意識していると述べる。いずれも、揺らぎ体験を
通じて、保育者としての姿勢や在り方を模索し確認
していると言える。具体的に何をその時経験し、次
に活かすか明確になっている。失敗や反省の理由を
自分なりに思考し、今後に活かすにはどうしたらよ
いかにについて、情報が含まれる形で記憶されている。
失敗がありつつも、その時の経験が今の保育に繋
がっていると感じられている。

これらに対して、保育者Eから保育者Gは、特に
低い保育者効力感を示した者の記述例である。保育
者Eは、クラス活動の中で、話を聞こうとしない子
どもの存在を契機に、揺らいだ体験を挙げる。当時
を振り返り、どうしたら興味を持ってもらえるか常
に考えていくことが大切だとしている。保育者Fは、
発表会に向けて練習をする中、支援を要する子ども
への関わりがうまくいかなかったエピソードを挙げ
る。この体験を踏まえて、全体をみたり予測をし
たりして保育を考えるようにしているとする。保育
者Gは、当時勤めていた園での鼓隊練習の体験を挙げ、
当時の上司にもっと相談をしていればよかったと振
り返る。「どうしたら興味を持ってもらえるのか常
に考えていくことが大切」「当時の上司にも、も
っと関わって、もっと相談してあればよかった」等
の記述に見られるように、具体的な情報として総括は
されておらず、また、現在の自分との繋がりに関わ
る記述が少ない傾向がある。揺らぎ体験を通じて、
自らの保育観や信念を確認し、保育者として何をす
べきか、自信や見通しを持つには至っていないこと
が推察された。

まとめと今後の課題

本論では、保育者の自伝的記憶であるアイデン
ティティの揺らぎ体験と保育者効力感等との関係を
検討した。具体的には、自伝的記憶としての揺らぎ
体験を持つ保育者とそれを持たない保育者では、保
育者効力感に違いがあるのか、揺らぎ体験の契機と

保育者効力感との関連はあるのか、等について検討
した。また、記述の質的検討を試みた。その結果、
次のような点が明らかになった。第1に、揺らぎ体
験を挙げる事が出来る保育者は、揺らぎ体験を挙
げることが出来ない保育者より、現在の保育者効力
感が高いことが明らかになった。また、揺らぎ体験
の契機による、保育者効力感の相違は見出されな
かった。一方、保護者からの指摘やクレーム等を契
機としたアイデンティティの揺らぎ体験は、長く自
伝的記憶として保持され、現在の保育実践に影響を
及ぼしている可能性が示唆された。

第2に、テキストマイニングによる量的な分析等
から、保育者効力感の高い保育者の揺らぎ体験は、
総じて自我関与性が強く、現在に至っては、自らの
連続性を確認する役割を果たしていることが示唆さ
れた。「自分」「自分自身」という語が、エピソード
の記述の中に頻出し、保育者としてのアイデンティ
ティが揺らいだ体験を自分なりに解釈している姿が
表れている。保護者に関わる記述が比較的多いのも
特徴と言える。これからの保育に活かすうる形で、
自伝的記憶が想起されやすいようパッケージ化され
ていることが示唆された。

本論では、自伝的記憶として揺らぎ体験を持つ保
育者の効力感が高いこと、効力感の高い保育者は自
我関与性が高い形で揺らぎ体験が記憶されているこ
とが示唆された。この知見を踏まえ、保育者効力感
の維持・向上に繋げるための具体的方策を提示する
ことが今後の課題である。今回、アイデンティティ
の揺らぎ体験に相当するエピソードを思い出して記
述することができない保育者が確かに存在し、これ
らの保育者の効力感が低いことが確認された。自伝
的記憶の機能(Bluck, 2003)から考えるとき、保
育者としての自己を確認したり、今後の保育を方向
付けたりするようなエピソードを持たないために、
保育者効力感が低下しており、自信や見通しに欠け
ている可能性も考えられる。過去の記憶の中から、
自身が経験した体験を、改めて再認識し、今まで意
識化されていなかった揺らぎ体験を自覚できるよう
促すことが効力感向上に繋がる可能性がある。

また、自伝的記憶として揺らぎ体験を挙げるこ
とが出来た保育者への働き掛けも考え得る。吉田・田
中・西山(2022)は、保育者自ら気づき、記憶した
「気づき体験」を、単に省察や反省のための出来事
とするのではなく、新たな枠組みで肯定的に捉え直
すことで効力感を高める機能を持った体験になり得
ることを明らかにしている。揺らぎ体験を改めて肯
定的に捉え、他者と共有する機会等を設けることで、
保育者としての確かな効力感の維持・向上にも寄与

表5 保育者効力感高群・低群毎にみた揺らぎ体験の記述例

保育者効力感・高群

●保育者 A (23 年前。公立幼稚園教諭 45 歳。保育経験 11 年)

就職当初は、皆同じようにできないと何でできないの？同じように話して伝えているのに…と理解や発達の差などみじんも考えず、必死で指導していた。また、それが園の方針だった。自分の言葉が足りないのか、指導力不足なのか、子どもが分かっていないだけなのか…。自分が母親になり再就職。誰にでも得意不得意がある、自分なりに頑張っている部分をしっかり認めてあげる、スキンシップの大切さ、寄り添いの大切さ、保育者の待つことの大切さ etc…、を自分自身が学んでいった。子どもにとって不理解の担任だったと思う。怖かったと思う。「なんでわかってくれへんの…」と知っている子どもがたくさんいたのではと反省している。

●保育者 B (14 年前。公立保育所保育士 44 歳。保育経験 24 年)

年長児を担当していた時に保護者からの相談があった。集会中に体育座りで座っている時など、特定の子どもに後ろから蹴られたり、保育者の見てない時にされた。気付かなかったため申し訳ないと感じた。女兒同士であり、嫉妬心からくるものかと思った(蹴られた子どもはかわいく目立つ)。また蹴った方は、家庭に事情があり、母親も若いため、祖母の協力はあったものの寂しい気持ちからの要因があるかもしれない。「友達関係をよく観察する」「仲よく遊べる集団遊びを取り入れる」「自分がされて嫌なことは人にはしないことを話をする」など取り組んだ。子ども同士の人間関係の作り方も大切。一人一人が寂しい思いや困ったことがないかを敏感に察しないといけなかったなと反省で思い出す。

●保育者 C (20 年前。私立保育所保育士 57 歳。保育経験 30 年)

子育て支援を初めて立ち上げスタートしたとき、手さぐり状態でしたが、支援活動、ボランティア育成、サークル育成などチャレンジしていました。少しずつ、それなりの努力で形が見え始め、ある時期達成感を母親らと共に感じ喜び合ったものの、それを一段階の成果として認めてもらえず、自分のやってきたものは？自分は何のために？と迷子になったときがありました。何をどう定着させていいか苦しんだ頃だったので余計にそう思いましたが、今はその時の苦労が土台となったと思います。後にたくさんの母親らから感謝され、自分がいたから「今の家族が存在した」と言葉にされ、その言葉の深さを感じています。

●保育者 D (25 年前。公立保育所保育士 50 歳。保育経験 20 年)

給食の苦手な子どもがいて、給食が原因で親子共にストレスもあり、園長、給食担当、保護者と相談し、その子どもだけしばらく家庭弁当を持参するようにしていた。その子どもの園生活全般を見ながらいろいろと指導法を工夫し、家庭とも連携しているつもりだった。その子どもの様子も落ち着き、給食でも大丈夫だろうという判断で他児と同じ給食にした頃、その時の私の連絡帳の書き方がまずく、保護者の方を傷つけてしまったようで「先生には(自分の)子どももいないし、親の気持ちが分からない」と憤慨されてしまった。その子どものためにと思って書いた言葉の真意が伝わらず、また自分の不妊に対して悩んでいた時期なのでかなり落ち込んだ。それ以降、その保護者との関係は元のように修復できなかったが、相手の立場になって物事を進めるよう心がけるようになった。私の保育はまちがってはいるが未熟だったと思う。

保育者効力感・低群

●保育者 E (11 年前。私立保育所保育士 37 歳。保育経験 17 年)

クラス全体で話をしている際、話を聞かない子どもがおり、そこから全体が落ち着かない状態に。そのとき、なぜ話が聞けないのだろう、しかも毎回毎回続くのでその子どもに対する思いが否定的な見方でしか見られなくなりました。そして子どもが好きなのになぜ私は毎日子どもを怒ってばかりなんだろうと自己嫌悪に。経験を重ねるうちに先輩の姿を見習ったり、子どもが興味を持って見たり聞いたりできるような話し方、視覚的な知らせ方をし、子どもが興味を持ってくれた時のうれしさを覚えていきます。振り返って自分はもうどうしたら興味を持ってもらえるのか常に考えていくことが大切だと思いました。

●保育者 F (2 年前。私立保育所保育士 33 歳。保育経験 10 年)

私が年長児を担当していた時、発表会に向けて練習を始めました。発達障害児が数名いる中、A 児、B 児、C 児それぞれに環境を整え、目標をもって臨めるようにしてみたが、A 児は B 児に、B 児は A 児の行動につられてしまい練習に参加しなくなりました。A 児のため、B 児のためと個別に支援を考えていたが、同じ部屋にいる者同士、お互いの存在が大きすぎてうまく作用しなかったこと、個ばかり見て全体が見えていなかったと反省した。その時はうまくいかなかったが、その後の保育ではもっと全体をみたり、いろいろなパターンの予測をして保育を考えていくよう努めている。

●保育者 G (13 年前。公立幼稚園教諭 33 歳。保育経験 10 年)

当時勤めていた私立保育所では、4 歳児クラスになると強制的に鼓隊の練習が始まった。何も分からない私は園長先生をはじめ、上司に相談したが、誰一人として何も教えてくれなかった。自分なりに考え、相談していたのに、「考えたならば、それをすれば良い！」と言われたり、音楽指導とは何かを話されたり…。結局、指導の仕方、方法などは分からないまま…。ただただ、私がおかしいと…。そのうち、私が子どもに対して「何でできないの?」「何でこんな事してしまうの?」と少しずつ、子どもにもツラくあたってしまうようになった。どうしたらいいのか…。とにかく当時はすべてがカラ回りだった。その後はお世話になった上司の保育をいろんな角度から見るようにして、良い所をどんどんマネするようにした。ただマネするのではなく、いろんな先生に相談したり、自分なりにアレンジしたりして少しずつ経験を重ねていった。当時の上司にも、もっと関わって、もっと相談していれば良かったなあ…と思います…。

すると考えられる。自らの揺らぎ体験を意味ある形で記録, 保持, 想起することは, 一時的な意欲の向上に止まらず, 長期にわたり保育者を支える資産になり得ると考えられる。

文 献

足立里美・柴崎正行 (2010) 保育者アイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と再構築の構造についての検討—担任保育者に焦点をあてて—, 保育学研究, 48(2), 213-224.

Bandura, A. (1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84(2), 191-215.

Bluck, S. (2003) Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life. *Memory*, 11(2), 113-123.

Cohen, G.(1996) *Memory in the real world (2nd ed.)*. UK: Psychology Press.

Conway, M.A., Singer, J.A.,& Tagini, A.(2004) The self and autobiographical memory: Correspondence and coherence. *Social Cognition*, 22(5), 491-529.

Erikson, E.H. (1980) *Identity and the life cycle*. Psychological issues Vol.1, No.1, Monograph 1. New York: International Universities Press. (西平直・中島由恵訳 (2011) アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)

畑野快 (2020) パーソナリティ研究の動向と今後の展望—パーソナリティ特性, アイデンティティを中心とした変化・発達研究の展開に向けて—, 教育心理学年報, 59, 57-73.

樋口耕一 (2012) 社会調査における計量テキスト分析の手順と実際—アンケートの自由回答を中心に 石田基広・金明哲(編) コーパスとテキストマイニング 共立出版 pp.119-128.

樋口耕一 (2020) 社会調査のための計量テキスト分析 (第2版) 内容分析の継承と発展を目指して ナカニシヤ出版

樋口耕一・中村康則・周景龍 (2022) 動かして学ぶ! はじめてのテキストマイニング フリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキスト分析 ナカニシヤ出版

松本裕治 (2000) 形態素解析システム「茶筌」, 情報処理, 41(11), 1208-1214.

三木知子・桜井茂男 (1998) 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響, 教育心理学研究, 46(2), 203-211.

森上史朗 (2000) 保育者の専門性・保育者の成長を問う, 発達, 83, 68-74.

中間玲子・杉村和美・畑野快・溝上慎一・都筑学 (2015) 多次元アイデンティティ発達尺度 (DIDS) によるアイデンティティ発達の検討と類型化の試み, 心理学研究, 85(6), 549-559.

日本発達心理学会 (2000) 心理学・倫理ガイドブック—リサーチと臨床— 有斐閣

西山修 (2006) 幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成, 保育学研究, 44(2), 246-256.

佐々木智美・皆川直凡 (2013) 大学生・大学院生が想起する感動体験の特徴の分析—自伝的記憶としての感動体験—, 鳴門教育大学情報教育ジャーナル, 10, 21-28.

佐藤浩一・越智啓太・下島裕美 (2008) 自伝的記憶の心理学 北大路書房

Stephen, J., Fraser, E., & Marcia, J. E. (1992). Moratorium-achievement (Mama) cycles in lifespan identity development: Value orientations and reasoning system correlates. *Journal of Adolescence*, 15(3), 283-300.

高濱裕子 (2001) 保育者としての成長プロセス—幼児との関係を視点とした長期的・短期的発達— 風間書房

吉田満穂・片山美香・高橋敏之・西山修 (2015) 保育経験年数からみた気付き体験の特徴, 岡山大学教師教育開発センター紀要, 5, 9-18.

吉田満穂・西山修 (2017) 保育実践における気付き体験と保育者効力感との関係, 応用教育心理学研究, 33(2), 3-13.

吉田満穂・田中修敬・西山修 (2022) 気付き体験を活かして効力感を高める保育者支援プログラムの開発, 応用教育心理学研究, 38(2), 3-16.

付 記

本研究は, JSPS 科研費 19K02585 の助成を受けた。